

発行所 日本キリスト教団 なか伝道所
〒231-0026 横浜市中区寿町 3-10-13 金岡ビル 205
Tel. (045) 671-1109
振替 00200 - 1 - 47369
E-Mail : naka-ch@hb.tp1.jp HP : http://church.jp/naka/
発行者 なか伝道所／編集委員会 (題字 松橋 順)

宣教方針

- ① 貧しい人々への福音に共にあずかる。
- ② 地域の問題に関わる。
- ③ 諸教会に呼びかけてゆく。

集会 主日礼拝 日曜日(第1・第3・第5)
午前10時30分より

「苦難の中のクリスマス」



十二月十四日、巡回教師として、なか伝にも何度も来てくださった関田寛雄先生が天に召されました。哀悼。

一九七〇年代、学生として関田先生に出会い、なか伝道所開設メンバーのひとりでもある幸子さんに、思いの一端を書いて頂きました。

予定されていた関田先生のクリスマス礼拝使信に代わり、渡辺英俊さんが急遽、ご担当を申し出てくださいました。感謝と共に、当日のメッセージを掲載させて頂きます。

関田先生を偲んで 渡辺幸子

十二月十四日に関田寛雄牧師が亡くなられました。九四歳でした。まだまだお元気でいてくださるだろうと思っていましたので、信じたくないう気持ちです。

日本基督教団神奈川教区の巡回牧師であった関田先生は、時々なか伝にも、来てくださいました。教区の中にある七つの伝道所を順番に回られているのでした。お住まいは千葉の大網白里市。遠距離のため、前日は川崎にあるカプセルホテルに宿泊されていました。「昨晩は川崎の集会に参加して・・・」とか、「今日はこれから関西に・・・」と言われることもあって、その強靱な体力にはいつも驚かされていました。

無牧のなか伝のことを気にかけてくださいました。「僕にできることがあったらやりますよ」との言葉に甘えて、昨年のイースター礼拝と、かないませんでした。十二月十八日のクリスマス礼拝での説教を願ひし、快く引き受けていただきました。そして、クリスマス礼拝の一週間ほど前には、お電話で、

- ・聖書『ルカによる福音書』一章四六～五五節、
- ・説教題『マリヤのクリスマス』
- ・讃美歌一七五番

と連絡がありました。お元氣そうな様子だったので、すっかり安心して当日を心待ちにしていた矢先の、突然の訃報でした。準備して下さっていた説教を聞けなかったことが、残念でなりません。

関田先生との出会いは、一九七〇年に入学した青山学院大学神学科に遡ります。当時はまだ各地で「大学紛争」が継続していて、青学も例外ではありませんでした。

権力を使って学生自治への締め付けを強化していた大木院長は、一九七一年、文学部教授会が入学を認めた東京神学大学からの編入希望学生に対して入学を拒否。さらに「神学科教師は造反神学、闘争神学、雑神学を教え、学生を使って青学を解体しようとしている」と主張して、一九七三年には神学科の募集を停止しました。大学の在り方を問うていた学生の主張に、真摯に耳を傾けようとしていた神学科の教師、そして神学を学ぶからこそ、社会の在り方と自らの生き方を問わざるを得な

った神学科の学生を、「いつも騒動の中心にいて大学に協力的でない」という思い込みで、自分に逆らう「異端者」として追い出そうとしたのでした。

在籍学生全員が卒業した一九七七年三月、存続の願いはかなわず、神学科は廃科となりました。自分の故郷が失われたようで、卒業生にとってはやりきれない出来事でした。

大学を訴えた三件の裁判が起きます。神学科の多くの教師が退職に追い込まれていきましたが、最後まで残っていた四人の教師の中の一人が関田先生でした。

関田先生には『実践神学』などを教えていただきました。記憶もおぼろげなのですが、「教会は他者のために存在する」と言われていました。一時期、ご自宅の一角で開かれていた「こひつじ保育園」で働いたこともあって影響を受け、親しみを感じつつも、尊敬する先生でした。いろんなことがありすぎて、当時は自分の未来を考えることができませんでしたが、それでも神学科は私の原点であり、学生一人一人のことを考えようとしていた良心的な教師の存在は、救いでした。

最近出版された『目はかすまず、気力は失せず』を送ってくださいました。「若いこんではおられない」と最後の最後まで走り続けた関田先生の意思を、自分なりに少しでも受け継いでいきたいと思っています。

寿越冬報告 22年末〜23新年

山口雅典

今回の越冬は何かと手探りする事があり、とても良い経験になりました。統一作業から始まり、電気配線などは細かく図面で書いてあり、配線の長さから始まり、電球を使用する距離を決めていたので、作業はスムーズに進みました。

今回も規模の縮小で、テントは本部テント込みで大きなテント三張り、そして今回の越冬では、医療班の横に幅三メートル四方のテントを設置し、コロナ対策用として活用。抗原検査の為に訪れた方が数人居ましたが、皆さん、陰性だったので、とても安心しました。今回初めての試みで、これからの対策について良い学びしたいと思います。コロナの収束がまだ未知の状態であるのであれば、次回の越冬に生かしていけると思います。

又、様々な方々が多く参加されたことで、年末から一緒に楽しく作業する事が出来ました。なか伝の皆様、本当に有り難う御座います。配食については、寿では昨年から少し若い方々が多く見られる様になりました。これも今の社会的弱者救済に対する政府の対策が重要であると思っています。



◆ご無沙汰しております。誕生日やクリスマスなどにお葉書を頂き、誠に有難うございます。二月で伊東に引越し、一年となりました。この場を借りて簡単に近況報告させて頂きます。

・自宅の庭で鶏を飼い始めました。現在四羽で毎朝卵を産みます。追加で五羽の雛を飼う予定です。

・自宅の庭と借りた畑で家庭菜園を始めました。

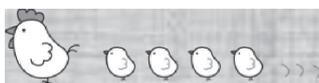
・毎週末、子どもたちと釣りをしております。釣れるのはカマス、ボラ、メジナ、など。

・長男が五歳・幼稚園の年中、長女が二歳となりました。

・仕事では引き続き、洋上風力発電所の案件開発に携っております。

・家の近くの宇佐美教会の礼拝に参加しております。礼拝堂とは別の部屋で係の方が子どもの面倒を見てくれる、各種子ども向けイベントも企画されている、などの点で妻の理解が得られ、子どもたちも連れて行っております。落ち着けば、なか伝道所の方にも顔を出したいと思っております。今後ともどうぞよろしくお願いたします。

(松田祐作)



風景

使信「苦難の中のクリスマス」

ルカによる福音書二章一〜七節



渡辺英俊

まず、関田寛雄牧師のご逝去を、謹んで哀悼申し上げます。

最も尊敬する先輩の一人を失い、シヨックを受けています。それも、なか伝道所での使信を担当していた

だく筈の日を直前にしてのことでお前は何をしているのだという叱責を受けたように思われ、使信代行を申し出ました。穴埋めにはなりません、お許しください。

使信に先立って、関田牧師のご冥福を祈り、黙祷をいっしょにお願いします。(黙祷)

聖書にはマタイ版とルカ版の二つのクリスマス物語が伝えられています。いずれも、メシヤ・キリストへの信仰を表現するために、美しく飾られた物語です。マタイ版は、星を目当てに「東」の国から旅をしてきた「占星術の学者」たちの話で、またルカ版は、天使の群れが現れて御

子の誕生を告げる場面で飾られています。物語というのは、事実がどうこうではなく、それを語り、また伝えた人々の思いを受け止めることが大切なのだと思います。

その上で、気を付けて読むと、マタイとルカが別々に語っている二つのクリスマス物語の根底を流れている共通点があることに気付かされます。もちろん、後の教会のメシア信仰によって飾られているというのが一方の共通点ですが、その反対の極にあるような、もう一つの共通点を見て取ることができると思います。

マタイの方では、イエスは生まれるとすぐにヘロデ王の迫害の危険にさらされてエジプトに避難したという筋書きになっています。生まれたばかりの赤ん坊を連れて、荒野を越えて見ず知らずの異国に難を逃れるというのは、今ウクライナの人々が

受けている苦難とそのま重なるような場面ではないでしょうか。またこれは、今日の世界の難民条約が定義する難民そのものの姿ではないでしょうか。それは、どこか海の向こうの国での話ではなく、今、わたしたちの住む日本でも、起こっていることです。難民を認めることを極端に厭がる日本政府の政策の下で、働くことも認められない状態に置かれたり、長期収容されたりしている難民の状態とつながっている場面だと思われれます。

マタイは、イエスの誕生にまつわる物語の状況の中に、今日の難民がおかれているような、苦難の状況を描き出しているのです。イエスは正にそういう状況を背負って生まれたというのです。

それから、ルカの方を見ますと、イエスの両親が旅の途中で泊まるどころがない状態で生まれ、飼い葉桶に寝かされると伝えてあります。そういう状態に置かれたのは、ローマ皇帝アウグストの人口調査の命令のせいでとされています。登録をするために、今で言う「本籍地」に戻らなければならなくて、身重の妻を伴って旅をしたという設定になっていま

す。話の筋書きとしては、ローマ皇帝という巨大な権力の理不尽な支配の末端で、振り回される民衆の姿が描かれているわけです。困難を抱えている一組の夫婦が、泊まる場所がないまま出産を迎えたというのです。これは、今日で言えば、ホームレス状態におかれたということに変わりはないでしょう。

マタイにしてもルカにしても、その物語の奥には、巨大な権力の抑圧の下で、難民やホームレスのような苦難を負わされる民衆の姿が見え隠れしているのがわかります。そういう苦難の極限に置かれた状態の中へ、イエスは生まれたというのが、そこから透けて読めるメッセージなのです。

今年も、わたしたちは、先の見えにくい世界の中でクリスマスを迎えます。とりわけ、ウクライナへのロシアの侵攻は、世界を真つ暗にするような危機に陥れました。他方では、これに便乗して四十兆円の軍事予算を組むという政策が進められています。自然破壊や浪費社会の歯止めのない進行、経済格差の拡大による貧しい人々の生活の破壊が、戦争以上の被害を生んでいます。わたしたち

の小さな力ではどうにもならないように思われる問題に直面します。

イエスは、そういう世の苦しみの極限におかれた人々の場に生まれたというのです。それは、神が正にそのような世の苦しみのただ中に共にいてくださり、苦しみを身に負い、引き受けて下さるといふ知らせだと思います。

今、私は、自分が動くことのままならない老齢の身になって、何とも動かしようのない問題に囲まれて、何もできない自分にもどかしさを感じる事が少なくありませんでした。寿でもそうですし、辺野古やフクシマや、かつての私の直接の働き場であったカラバオの会や移住連でも、仲間たちが懸命に活動しているのをただ見ているだけの自分が申し訳ない思いでした。今でも、少なからずそうです。

しかし、今日のメッセージが示しているのは、世の苦しみのあるところこそ、イエスは来てくださったのであって、そこでこそ、生きて働いておられるのだ、ということ。そこから見直すと、今日の人々の苦しみのあるところには、問題と取り組む人々の姿もあることに気付か

れます。この仲間たちの働きは、そこにおられるイエスの働きの見える姿なのだということに気付かされるのです。

そう思ってみると、イエス様がそこら中に一杯いて働いていてくださる、ということ。亡くなられた関田牧師も、私にとってはそういう一人でした。イエスが、あちこちに一杯いるのを見ることが出来る…。

これは喜びであり、励ましです。かつてのような活動ができない自分であつても、そういうたくさんのイエスの姿を見出し、祈りを以てそれに参加できるんだ、というのが今の思いです。

それが、今年私の受け止めたクリスマスのメッセージです。

(二〇二三年十二月十八日)

新刊☆紹介

『横浜寿町
地域活動の社会史』

上・下巻

寿歴史研究会 編

2022年12月22日発行

社会評論社

定価：上下巻、各2,600円＋税

雑感

今、私たちは、自然破壊と戦争、差別

と人権侵害の状況に直面しています。沖縄、奄美での民意を無視した新基地建設、重大な欠陥の指摘される「オスプレイ」に加え、「トマホーク」ミサイルの大量購入が、あつという間の政治判断で行われ、三月には世界の軍需産業の展示会が、この日本で開催されました。

戦時は壊滅的被害を出す標的となりうる原発（老朽化も危険）の使用延長も、政府が決定しました。恐れと不安の中で、私達は、何をしましうか？

例えば「敵基地攻撃能力」とか「先制攻撃と報復攻撃」等、戦争と武器の用語を心に取り込まないで、「NO!」と言い続けませんか？かつて国家の戦争に協力した日本基督教団の罪責を、私たちが忘れた時、歴史は繰り返すのですから。

『非戦』を誓った憲法が国の指導者によってひっくり返される不安の中、非暴力抵抗の場面で歌われてきたひとつの歌が頭の中を巡ります。

「われら揺るがず、水辺に立てる
木のごとく、われら揺るがず。」

戦争や力の行使が人々の命と生活を壊し、平和と未来を踏みにじる社会にしないため、教会もまた、共に祈り立つことへと招かれる、「恵みの水辺」ではないでしょうか。(公)